

連載 | 追う | 地域発 | 語る | 問う

論説 特報

障害者政策もやはりこの社会の影響を受けており、その点では優生思想「現代社会」「障害者政策」という視点から議論を深めていく

障害者政策もやはりこの社会の影響を受けており、その点では優生思想「現代社会」「障害者政策」という視点から議論を深めていく

今回の事件は極めて特殊で異常な事件だが、それだけでは片付けられない。特殊性は捜査機関や法廷で心理学や精神医学も動員して真相が究明されるだろう。特殊だというだけで片付けられない問題は社会の側から考えなければならぬ。優生思想に基づき事件が起これたのならその温床、遠因、背景は現代社会に潜んでいる。生産性や経済性、効率、速さが人を図る尺度になっており、容疑者もそうした社会に生きてきた以上、影響はあったと思う。単独犯ではあるが、強大な共犯者に後押しされた単独犯という言い方もできる。

この手紙は優生思想、あるいは優越的な感覚に基づく視点で書かれている。私にはナチス・ドイツによる障害者抹殺政策「T4作戦」が重なった。

辞めていただとはいえ、自分たちを最も守ってくれる職員が容疑者だったという事。そして容疑者が犯行前に衆院議長に宛てた手紙だ。重度障害者は生きていても仕方がない、安楽死させた方がよいと主張している。この三つ目の怖さにより、すべての障害者は自分に刃を向けられている感覚を持つことになった。

事後、全国の仲間から「怖い」という声が届く。それは三つの怖さだ。まず手口があまりに残念。

相模原市緑区の障害者施設「津久井やまゆり園」で入所者19人が刺殺され、27人が重軽傷を負った事件から2カ月余りたった28日、事件をどう捉え、何を教訓とすべきかを考える討論会が参院議員会館で開かれた。登壇した障害者、家族、支援者、有識者ら発言から戦後最悪レベルの事件と向き合う視点を考えたい。初回は自身も視覚障害者である、日本障害者協議会の藤井克徳代表のスピーチを紹介する。

時代の正体 障害者殺傷事件考

2009年には鹿児島県阿久根市の竹原信一市長(当時)がブログに「高度医療が障害者を生き残らせている」と書き、元愛知県知事の神田真秋氏は07年、新人職員の入庁式での訓示で、障害のある

神奈川県警は被害者氏名を公表していない。社会からの黙殺であり「二重の殺人」といつていい。家族には複雑な思いがある。県警は遺族が匿名発表を望んでいるという。そうであるなら家族に隠させている社会に責任があり、やはり社会が黙殺しているということになる。

今回の事件は日本社会の投影であり、日本の障害分野の縮図を見ることが出来る。

必要がある。

「あいつ入つてのは人格あるのかね」と言い、茨城県教育委員の長谷川智孝氏は教育施策を話し合う会議で「妊娠初期にもつと(障害の有無が)分かるようにできないのか」「茨城県では減らしている方向になつたらいい」と発言している。つまり一貫してこの社会にはこうした考えが潜んでいる。非常に根深く、決して特異な話ではなく、ある意味では蔓延している。

この問題は政治の表舞台できちんと議論をしてもらふ必要がある。行政の中心課題にしてもらふ必要がある。11年7月、銃の乱射などで77人が殺された事件がノルウェーであった。かの国では国を挙げて事件を総括し、再発防止のために社会の基礎をどう築いてい

人たちについて「弱い遺伝子、悪い遺伝子が出た方」と発言している。石原慎太郎氏も都知事時代、重度心身障害児者の施設を視察し「あいつ入つてのは人格あるのかね」と言い、茨城県教育委員の長谷川智孝氏は教育施策を話し合う会議で「妊娠初期にもつと(障害の有無が)分かるようにできないのか」「茨城県では減らしている方向になつたらいい」と発言している。つまり一貫してこの社会にはこうした考えが潜んでいる。非常に根深く、決して特異な話ではなく、ある意味では蔓延している。

行政の検証委員会もあまりに对症療法的だ。確かに精神障害者政策は遅れがあり、その一つとして入院制度が検討されるのはよいだろう。防犯対策も必要なら論じてよい。しかし、それはたとえば知的障害者12万人以上が施設に入りつばなしといった問題を論ずることを抜きに議論されており、あまりに根本を欠いているといわざるを得ない。

そこからは社会防衛策の強化しか出てこない。行政者、為政者はそのことを注意してほしい。精神科病床数が一気に増えた1964

特異な事件ではない



藤井代表 28日、参院議員会館で「怖さ」を語る

日本障害者協議会 藤井 克徳 代表

そこからは社会防衛策の強化しか出てこない。行政者、為政者はそのことを注意してほしい。精神科病床数が一気に増えた1964

非常に根深く、決して特異な話ではなく、ある意味では蔓延している。

非常に根深く、決して特異な話ではなく、ある意味では蔓延している。

非常に根深く、決して特異な話ではなく、ある意味では蔓延している。

非常に根深く、決して特異な話ではなく、ある意味では蔓延している。

非常に根深く、決して特異な話ではなく、ある意味では蔓延している。

非常に根深く、決して特異な話ではなく、ある意味では蔓延している。

事件に抱いた「怖さ」を語る藤井代表 28日、参院議員会館

非常に根深く、決して特異な話ではなく、ある意味では蔓延している。

非常に根深く、決して特異な話ではなく、ある意味では蔓延している。

非常に根深く、決して特異な話ではなく、ある意味では蔓延している。

非常に根深く、決して特異な話ではなく、ある意味では蔓延している。

非常に根深く、決して特異な話ではなく、ある意味では蔓延している。

非常に根深く、決して特異な話ではなく、ある意味では蔓延している。

非常に根深く、決して特異な話ではなく、ある意味では蔓延している。

非常に根深く、決して特異な話ではなく、ある意味では蔓延している。

非常に根深く、決して特異な話ではなく、ある意味では蔓延している。

埼玉県内に入所施設の運営などを手掛ける社会福祉法人みぬま福祉会の理事新井たかねさん(70)の長女(44)は、重度の心身障害がある。相模原の障害者施設殺傷事件から2カ月余、自身の内なる優生思想と向き合う日々だったと打ち明けた。(石橋 学)

討論会④

事件を知り、娘と同じような障害を持つ人たちが声も上げられず命を奪われた状況を想像し、胸がつかれる思いでした。発症者が元職員で、障害のある人たちの命と存在を否定する言動をしていたことを知った時は、憤りで体が震えました。

その言動の背景に優生思想があると言われていますが、この日会場に私自身はどうであつたのかというところに向き合ってきました。娘の障害を受け入れるまでには簡単ではない道のりがありました。生後4カ月で脳性まひと診断され、障害を持ちながら幸せに生きていけるだろうか、娘に謝りながらの日々でした。

克服への最初の一歩は娘が生まれる前、木村浩平さんの本に出会い感銘を受けていたことにあります。必ずしも動く手足で筆を揮き、短歌を詠み、子育てもする。その生き方を否定するのかと、私自身に問い直しました。

もう一歩は養護学校義務教育化の4年前、重症心身障害児を守る会に養護学校準備室の先生が来て、皆さんのお子さんも入学できるように一緒に声を上げましょうと呼び掛けたときです。

あるお母さんは「うちの子は教育を受けても社会の役に立つとは思えない」と言いました。それに対して先生は「どんなに障害が重くても社会に役立っています。生きています。それだけで周囲の人に自分の生き方や社会の在り方を考えさせてくれる大切な存在です」と話しました。こんな価値観があるのだと衝撃を受け、その言葉に

ずつと支えられてきました。もう一歩は、全国障害者問題研究会の埼玉大会に3歳だった娘を連れて参加したときです。「発達は無限という考え方は娘にも当てはまるのでしょうか」と声を震わせながら質問しました。多くの方から子どもの発達の様子が語られました。私には「娘には当てはまらない」と言っていました。発達すると思えること、とにかく集団の場に入れなさい、生活リズムができ、健康につながり、必ず発達につながりますよと言われ、その言葉に背中を押されました。就学前の母子通園施設に通い、「障害の重い子は学校のまだ」と熱く語る先生方に教育を受け、娘らしい人生を願い、惜しめない支援を寄せてくれる職員の皆さんに出会い、障害者自立支援法違憲訴訟の原告として、この時代に生きる者の役割を担えたことも大きなことでした。

■ 尊厳を守る責務

娘と私には大切な出会いがあり、学ぶ機会に恵まれ、育ち合い、手をつなげる仲間たちに恵まれ、心の奥底にあった優生思想的な考え方を克服してきたのだと

時代の正体

障害者殺傷事件考

政治行政の不作為こそ

今回の事件を通して気付かされました。社会もまた、人権や尊厳を学びながら優生思想を克服する努力を重ねてきたのだと思います。近ごろ、障害者や高齢者、女性や子どもたちに対する政治家の人権侵害、差別発言が続いています。それを許している社会の風潮から、発症者は学びませんでした。はいかと思えてなりません。

政府もまた自立自助と自己責任を強調し、社会的に困難を抱えている人たちに対する差別と偏見、排除に拍車を掛けていないでしょうか。命と人間の尊厳を守ることが、政治と行政の最も根本的な責務です。私は今回の事件で、入所施設の問題を指摘する意見が出ていることにも心を痛めています。重症心身障害者の医療と暮らしに尽力してきた小児科医の高谷清先生が「施設で暮らすのが、地域で暮らすのが問題ではなく、周囲とどれだけ豊かなつながりをつくれるかが大切だ」と言われ、生活単位を小規模にして家庭的にすればよいのではと発言されていることに勇気を頂きました。

娘は、私だったらこんなところに住みたいという願いや知恵を集

めてつくり上げた入所施設で暮らしています。人権を最大限尊重し、一人一人の人生を豊かにと願う支援が重ねられ、そこには豊かな人間関係、信頼関係が築かれています。

娘は最近呼吸に困難を抱え、呼吸補助装置を着けてリハビリに取り組むことになりました。意思表示が困難な障害の重い仲間たちが大勢いる中で、看護師から娘の状態と装置についての説明がありました。説明が終わると入の女性が娘の傍らまで懸命に車いすを動かす、手を握って泣くのです。いかめしい装置に驚いたようです。「心配してくれたのね、楽になるのだから安心して」と話すと納得してくれました。

みんなで見守りますからねと伝えられる人、私の手に沿るといって書いてくれる人がいました。このとき、娘の家族はここにいないと思うことができました。家族を自らつくるのが難しい娘たちが、心を通わすてきな家族をつくっています。

■ 「人生に疲れた」

障害者の生活と権利を守る全国連絡協議会(障全協)が昨年行っ



内なる優生思想と向き合ってきた日々を振り返る新井さん(28日、参院議員会館)

社会福祉法人 新井たかね 理事

みぬま福祉会

た障害者の健康に関する実態調査では、主たる介護者の91%が母親でした。自由記述欄には「不安な毎日」「先を考えると心配」と「不安」「心配」の文字がたくさん並んでいました。

福島・会津の方は「自宅から通える学校がなく、親仲間と学校づくり運動、卒業すれば作業所運営、制度が多ければNPOの立ち上げと力の限りをやってきました。すでに70代、80代になり、自分に何かあったら不安な毎日、グループホームが夢だが、資金のことを考えると夢で終わらそう。こんなに頑張ってきたも安心できない毎日なんておかしいです」と書かれました。80代と思われる方は筆ペンでひと言「人生に疲れた」と書いていました。

埼玉県の入所待機者は1400人になります。私のすぐ近くで母親が命を絶つ事件が続いています。同じ時代に生まれながら、娘たちとの大きな違いに愕然とします。政治や行政の不作為によって悲劇が起きていることにもつかり向き合うことが必要です。

どんなに障害が重くても生まれ育った地域で安心して暮らし続けられる設備と人材の整った入所施設の整備は、喫緊の課題です。施設から地域へ出て、命懸けで地域生活を切り開いてこられた皆さんの努力には心から敬意を払います。そして、その深い思いにも共感しています。

一方、意思表示が難しい、自分の暮らしをプログラムすることが難しい娘たちの暮らしのありようについても、この機会に共有していただきたいと切望します。日本障害者協議会は2013年、障害者の入所施設改革に関する提言をまとめました。提言に基づき間題的・管理的、人権がないがしろにされている入所施設の改革・改善にも早急に取り組まれることを、より願っています。

